

清末における進化論の翻訳

—西洋と日本からの進化論導入—

一、本論文について

1. 研究目的

1895年、清国は日清戦争で敗北し、台湾、澎湖列島などを割譲する下関条約を日本と締結した。1900年、清朝政府は、「扶清滅洋」のスローガンを掲げた義和団を利用して列強に宣戦布告し、その結果、北京は8カ国の連合軍に占領され、翌年、11カ国と辛丑条約を結ばざるをえなかった。このような過酷な国際情勢を背景にして、進化論が中国に導入され、中国社会に多大な影響を及ぼし、子どもさえ進化論を学ぶべきだという風潮が現れた。

進化論 (theory of evolution) とは、すべての生きている有機体 (all living organisms) が変化 (alteration) と多様化 (diversification) によって単純なものから複雑なものへと進化していくという考えに基づく学問分野である¹。イギリス人博物学者ダーウィン (Charles Robert Darwin、1809年～1882年) が1859年の『種の起源』(The Origin of Species) で自然選択説を主張した時点で、進化論が自然科学の学説として確立された。それから数十年間経って、この学説は東アジアの日本と中国に導入されたのである。

日本では、進化論の導入は1877年にアメリカの動物学者のモース (Edward Sylvester Morse、1838年～1925年) が東京大学で講義や講演を行ったことから本格的に始まったとされている。しかも、進化論が導入される前に、文明開化、天賦人權説などのような近代ヨーロッパ思想がすでに体系的に導入されていた。その一方、「進化論は中国にあって、はじめて体系的に紹介された近代ヨーロッパ思想」であった²。その本格的な導入は厳復訳『天演論』(1897年末から連載) から始まったが、この翻訳ではハクスリー (Thomas Henry Huxley、1825年～1895年) 著『進化と倫理』(Evolution and Ethics、1894年) が忠実に訳されたわけではなく、厳復の案語 (厳復によるコメントや説明) や加筆から厳復自身の政治思想、スペンサー (Herbert Spencer、1820年～1903年) の社会進化論などが読み取れる。つまり、中国での進

¹ Oxford English Dictionary (オンライン版: <http://www.oed.com/>) ; フランク・B・ギブニー編集『ブリタニカ国際大百科事典 小項目事典』3、東京: ティビーエス・ブリタニカ、1973年初版、1988年改訂版、697頁; フランク・B・ギブニー編集『ブリタニカ国際大百科事典』10、東京: ティビーエス・ブリタニカ、1973年初版、1988年改訂版、232-246頁を参照。

² 伊藤秀一「清末における進化論受容の諸前提: 中国近代思想史における進化論の意味(1)」神戸大学: 『研究』22号、1960年3月、62頁。

化論導入は日本と異なって、翻訳書から始まり、しかも、最初から社会での活用が期待されたのである。

進化論の翻訳史・受容史は近代翻訳史・近代思想受容史の典型的な事例として、近代の歴史的思想変動を反映している。任達 (Douglas R.Reynolds) は、1898 年から 1907 年までの間を中日関係の「黄金の十年」 (a golden decade) としている³。この時代を背景にして、中国では、進化論が西洋から直接導入されて間もなく、日本を経由して導入される経路が現れた。このような視点から、筆者は「清末における進化論の翻訳——西洋と日本からの進化論導入」というテーマを設定し、この時期の進化論翻訳書を具体的に分析することにした。

2. 研究方法

進化論はとりわけ社会進化論として近代中日両国に大きな影響を及ぼした。しかも、両国の進化論の受容には「時差」がある。本論文は四章から構成されている。第一章は中日両国における進化論翻訳の歴史的背景を考察し、その後、図 1 が示すように、中国の進化論の導入経路、即ち、西洋と日本からの進化論導入の経緯を検討した。第二章は英語の原著を底本にした『天演論』と『斯賓塞爾勸学篇』、第三章は日本語の原著を底本にした『物競論』と『政教進化論』、第四章は日本語の翻訳書を底本にした「政法哲学」と『原政』を中心に取り上げ、訳書を原著と綿密に比較対照し、訳者による加筆、削除、修正などの作業に焦点を当てて分析した。

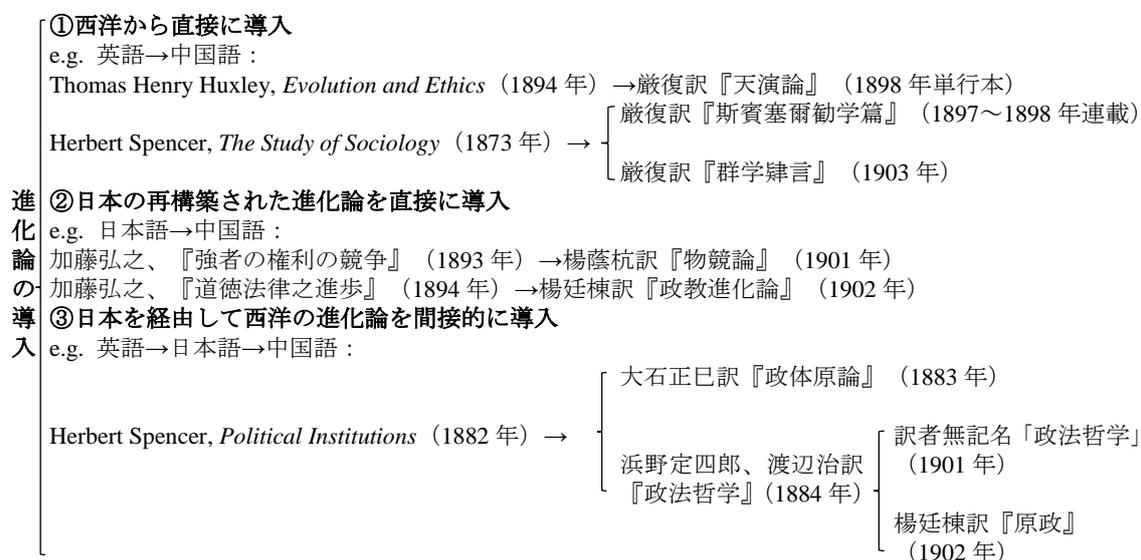


図 1 進化論の導入経路

³ 任達 (Douglas R.Reynolds) 著、李仲賢訳『新政革命與日本：中国，1898—1912』南京：江蘇人民出版社、1998 年初版、2006 年第 2 版、6 頁。

二、各章の要旨

第一章 中日両国における進化論翻訳の歴史的背景

近代日本と中国が西洋の学説を導入した際には、まず原語が読める人が日本語／中国語に翻訳し、あるいは日本語／中国語で説明して紹介するルートが考えられる。特に翻訳は詳細かつ具体的に西洋の学説を紹介できる思想伝達の重要な手段である。もし導入の起点となる翻訳が忠実でなければ、その後の受容は疑いなく歪むのである。しかし、中国では嚴復訳『天演論』がとりわけ注目され、研究されてきたにもかかわらず、ほかの進化論の翻訳書はこれまでほとんど分析されておらず、両国の進化論翻訳史・受容史の比較研究もなされてこなかった。

中日両国の進化論翻訳史・受容史は一つの独立した過程として理解すべきではなく、近代翻訳史、とりわけ近代社会科学翻訳史の一環として理解すべきだと思われる。本章は中日両国における進化論翻訳をその歴史的背景、即ち、近代翻訳史、近代社会科学翻訳史に位置づけて、これまでの数多くの先行研究をふまえ、中国と日本の進化論翻訳史・受容史を考察した。

両国の近代翻訳史を概観すれば、西洋の圧力で開国したことにより、ともに西洋から多大な影響を受け、両国の翻訳分野の関心は同じ順序で移り変わり、しかも、ともに翻訳規範が統一されず、「文語訳一口語訳」という規範文体の対立関係が存在し、社会各方面に大きな影響を及ぼしたことが分かる。なかでも、社会科学の翻訳史に関しては、両国はともに法学・政治学に焦点を当て、西洋文化の受け入れ及び翻訳語の導入の面で相互影響関係を持っていた。これを背景に、中国は進化論翻訳史が本格的に始まったのとほぼ同時期に、日本を経由して西洋文化を受け入れ始め、日本の進化論翻訳史と多くの共通点を持っているだけでなく、日本からも大きな影響を受けたのである。

具体的に言うと、その共通点としては、その一、日本と中国で最初に翻訳された進化論に関する書物はハクスリーの著作である。その二、『種の起源』の日本語訳と中国語訳は中日両国における進化論の登場より、共に約20年も遅れた。その三、両国ともに進化論を自然科学の真理として容易に受け入れ、進化論の社会での活用を重視していた。その四、両国とも政治的事件を契機にして進化論を社会思想として受け入れた。

とはいえ、社会科学翻訳史の相互的影響の角度から見ると、両国の進化論翻訳史・受容史にはかなり大きな相違が存在している。即ち、両国の進化論導入には「時差」があり、日本は西洋から直接進化論を導入し、中国のほうは西洋と日本から進化論を導入した。したがって、筆者は「西洋と日本からの進化論導入」という視点から考察を始め、進化論の翻訳史を近代思想の受容史として捉えてみたのである。

第二章 『天演論』と『勸学篇』の関連性から見た嚴復の政治思想

第二章では、最初に体系的に進化論を中国人に紹介した嚴復に注目した。嚴復が1897年末から『天演論』という翻訳を連載しはじめたことはよく知られ、嚴復や『天演論』につい

ての研究は数え切れないほど多い。しかし、『天演論』と同時期に連載された嚴復訳『斯賓塞爾勸学篇』はこれまで単に言及される程度にとどまっている。『斯賓塞爾勸学篇』の著者はスペンサーであり、周知のように、『天演論』の案語や加筆にスペンサーの存在感がかなり強い。したがって、本章では、同時期に嚴復によって訳された『天演論』と『斯賓塞爾勸学篇』はどのような関連にあるのか、両書には共通点があるのか、両書の共通点から嚴復のどのような政治思想を読み取ることができるのか、というような問題を究明してみた。

1895年3月、嚴復は『原強』という時局論文の冒頭でダーウィンとスペンサーを紹介している。ダーウィンとスペンサーの説に関して、嚴復は次のように指摘している。「歲月は悠々と流れ、四隣は耽々と狙い、恐らく何もしないうちに、(中国は)すでにインドやポーランドのようになっている。スペンサーの説の通りに行わないうちに、ダーウィンの理論の通りに淘汰されてしまう。況やそれ(スペンサーの説)が必ずしも遂げられるとは限らないのである」⁴。ダーウィンの理論は嚴復に中国が置かれている国際情勢を連想させ、多大な緊迫感を与えた。淘汰を避けるためスペンサーの説を活用するには時間が必要であり、間に合わないかもしれないし、そもそも実現可能かどうかは自分自身にもわからなかった。このような理想と現実をめぐる矛盾した心境が、第二章で比較分析したように、彼の訳文からも窺える。

1897年の末、『天演論』と『勸学篇』がほぼ同時に雑誌『国聞彙編』に連載され始めたことは、注目に値する。『天演論』(『進化と倫理』)の著者であるハクスリーはダーウィンの友人であり、丘浅次郎は「進化論の普及上には最も功績の著しい人」⁵と評価している。換言すれば、2つの訳書は『原強』が言及したダーウィンとスペンサーの論の延長線上にある。

原著と訳書を比較対照して分析することによって、『天演論』と『勸学篇』に嚴復の類似した政治思想とそこに潜む大きな矛盾が明らかになった。生物進化論から社会の情勢を連想する彼は、スペンサーの一元論的な社会進化論を支持し、その社会有機体説、社会進化論に魅了され、イギリスを理想的政治モデルと考えた。イギリス人の自治能力や愛国心などを羨望し、『天演論』と『勸学篇』では、イギリスのマイナス面を糊塗して、中国の読者にイギリスの理想的政治モデルをアピールしようとした。しかし、イギリス型の近代化は長い時間をかけての成果であり、中国の近代化にはそのような時間の余裕がない。このようなジレンマに陥った結果、彼はイギリスを第二段階に至ってからの模倣対象とし、第一段階における模倣対象をピョートル1世(1672年～1725年)が主導するロシアに設定した。そしてこの第一段階では、封建的国家の統治者である君主に民種水準の向上を主導し、民の忠誠心を喚起する役割を担わせるべく、訳文全体で統治者の役割を強調し、聖人の出現に期待を寄

⁴ 嚴復「原強」(1895年3月4日～9日)王栻主編『嚴復集』第一冊、北京：中華書局、1986年、9頁。原文：「而歲月悠悠，四隣耽耽，恐未及有為，而已為印度、波蘭之統；將錫彭塞之說未行，而達爾文之理先信，況乎其未必能遂然也」。

⁵ 丘浅次郎『進化論講話』東京：東京開成館、1940年、511頁。

せる姿勢を見せたのである。しかしながら、嚴復はこのような二段階的な主張を整序して明確に呈示することをしなかった。そのため、『天演論』と『勸学篇』には、嚴復の「矛盾」が多く見られるのである。

第三章 清末における加藤弘之の著作の翻訳および受容状況

『天演論』が出版されてから中国では進化論ブームを迎え、これを契機に、日本の進化論思想の代表者である加藤弘之(1836年～1916年)が中国知識人の視野に入ることになった。この現象について、従来の研究は、中国が加藤を通して進化論を受容したという経路の言及に止まっている。しかも、梁啓超が加藤の著作を紹介したことに留意はするものの、初期の在日中国人留学生の翻訳作業や受容状況に関する研究は非常に少ない。しかし、加藤弘之の著作の中国語訳中、『物競論』はまず『訳書彙編』という雑誌に連載された後、その単行本が訳書彙編社と作新社から第三版まで出版された。また、『政教進化論』も、出洋学生編輯所によって出版された後、広智書局版からも現れ、決して無名の翻訳書ではなかった。

本章では、まず、加藤弘之の著作の中国語訳に関する史料を整理することで、9点の中国語訳のうち、約半分が保皇派の梁啓超にかかわり、約半分が革命派の戡翼翬にかかわるものであることを明らかにした。戡翼翬は初期の在日中国人留学生として、出版界で活躍していた。彼が主宰した訳書彙編社で、在日中国人留学生たちは日本語の書籍を数多く翻訳し、楊蔭杭と楊廷棟はその中堅の訳者として、戡翼翬と同じく革命派に属していた。

次に、加藤弘之著『強者の権利の競争』と楊蔭杭訳『物競論』を比較する作業を通じて、両者の思想における相違点を探り、その意味を分析した。加藤は歐洲人種、日本人種、中国人種を優等だと認識しており、人種が優等であることを強者となる前提としている。明治維新の成功を誇る加藤は、日本が帝国主義の強国になることを期待し、侵略を正当化した。それに対して、楊蔭杭は人種の優劣は変動し得るものだと考え、弱者が強者になる可能性を肯定した。さらに、訳文における加筆・削除箇所から、楊蔭杭が加藤の意図に反して立憲君主制的専制への反感を持ち、民主主義的政治手段を評価していたことを突き止めた。つまり、楊蔭杭が訳した『物競論』は、加藤の『強者の権利の競争』とは異なる政治的メッセージを発信していたのである。

さらに、加藤弘之の原著『道德法律之進歩』と楊廷棟の訳書『政教進化論』を比較対照することによって、楊廷棟が加藤の口を借りて自らの主張を強く訴えようとしたことを明らかにした。近代中国における翻訳の規範は現代のように忠実性を強調するものではなかった。とはいえ、『天演論』を読んで影響を受けた楊廷棟は、訳者が「案語」を加えて明確に訳者自身の主張を表す方法を知っていたはずである⁶。しかし、楊廷棟はこの方法を用いず、直接的に原著の内容を削除・加筆・修正することを選んだ。その一つの理由は自分の身の安

⁶ 『政教進化論』の言葉遣いを見ると、楊廷棟は『天演論』の言葉遣いを多く模倣したことが分かる。例えば、楊は「群」、「首出庶物之人」、「天演」などのような『天演論』に現れた語彙を用いた。

全を守るためであり、もう一つの理由は革命思想に権威を付与し説得力を増すためであったと思われる。このような楊廷棟の「工夫」によって、中国を「開明の大国」と見た加藤は、中国がかつて世界の先頭に立っていたことのみを認める人物になり、日本の「開明進歩」を自負して各国間における侵略行為を正当化した加藤は、弱者を刺激して大いに発憤を促す人物になった。さらに、楊廷棟の「工夫」によって、忠君愛国を唱えて天皇制を擁護した加藤は、忠君に反対する人物となったのである。

この時期にまだ 20 代前半であった楊蔭杭と楊廷棟は、初期の若い在日中国人留学生とともに活躍していた。彼らが訳書の『物競論』と『政教進化論』で宣伝した自らの主張は独自の思想とは言えないが、革命派に属する在日中国人留学生の友人たちと共有する理念を反映していたと思われる。

第四章 スпенサーの進化論の翻訳と重訳

近代において、日本と中国で大きな反響を呼び起こした西洋の学者として、スペンサー (Herbert Spencer, 1820 年～1903 年) を無視することはできない。1877 年から 1898 年までの間に、スペンサーの著作の日本語訳は計 30 点現れている。中国の場合、日本に 5 年遅れて 1882 年に、中国人牧師の顔永京が最初にスペンサーの著作を英語から中国語に翻訳している⁷。しかし、当時の中国では、嚴復 (1853 年～1921 年) が 1895 年 3 月に発表した『原強』という時局論文でスペンサーを紹介し、高く評価するまでは、彼の著作がとりわけ注目されたとは言えない。当然ながら、日中両国におけるスペンサー受容には、「時差」が生じることになり、英語から直接中国語に翻訳するだけでなく、日本語訳を介した重訳も現れたのである。

これまで、スペンサーの著作の日本語訳とそれを介した中国語訳についてはほとんど研究されてこなかった。本章は、その典型例として、スペンサー著『政治制度論』(*Political Institutions*, 1882 年)、『政治制度論』を底本にした大石正巳訳『政体原論』と浜野定四郎・渡辺治訳『政法哲学』、後者の『政法哲学』を底本にした中国語訳の「政法哲学」(訳者無記名)と『原政』(楊廷棟訳)を考察した。

大石正巳 (1855 年～1935 年) は出身地の高知県 (土佐) で勉強した時期から自由民権運動の影響を受け、スペンサーの著作の翻訳、『社会学』と『政体原論』を出版したのも自由民権運動のための理論を探すためであったに違いない。一方、浜野定四郎 (1845 年～1909 年) と渡辺治 (1864 年～1893 年) がどのような立場でスペンサー著『政治制度論』を翻訳したのかは把握できないが、スペンサーの政治理論に関心を持っていたことは疑いがない。そして、彼らの共訳『政法哲学』は内容、訳文、宣伝の面で日本人読者の関心を広く集めたため、第三版まで出版されたのである。

浜野定四郎と渡辺治は比較的忠実にスペンサーの『政治制度論』を翻訳しており、日本語

⁷ 韓承樞「斯賓塞到中国——一個翻譯史的討論」国家教育研究院：『編訳論叢』第三卷第二期、2010 年 9 月、37 頁。

訳『政法哲学』から訳者自身の政治傾向は読み取りにくい、中国語訳の「政法哲学」と『原政』の翻訳者はそれぞれの政治的傾向を示している。

「政法哲学」の中国人訳者は嚴復が作った翻訳語に影響されず、和製漢語にも抵抗感を示していない。この訳者はスペンサーの社会進化論・社会有機体説を正確に理解し、スペンサーと同じく漸進的な社会進化に賛成している。訳文からも彼の光緒新政に対する期待感が読み取れる。

しかし、光緒新政を背景にして、『原政』の訳者である楊廷棟は嚴復訳『天演論』から嚴復の漸進的な政治思想は受け入れず、翻訳語と危機感だけを継承した。楊は伝統的な文体を保持したが、スペンサーの漸進的な理論より、むしろ進化論から当時中国が置かれていた国際情勢に危機感を抱き、急激な変化に期待していた。その結果、彼は嚴復の用語をしばしば活用して読者に『天演論』と同様のインパクトを与え、加筆して革命的な思想を伝えようとしたのである。ただし、楊が嚴復から借用した用語には、原語（英語）を知らなかったため、誤用したものもあった。

言うまでもなく、進化論思想を体系的に中国に導入した嚴復の『天演論』が及ぼした影響は極めて大きかった。本論文で詳細に分析した楊蔭杭、楊廷棟、「政法哲学」の無記名の訳者のみならず、梁啓超、章炳麟、馬君武などの進化論著作の著名な翻訳者たちももちろん『天演論』を読んでいた。しかしながら、これらの訳者たちもまた、『天演論』から嚴復の政治思想を継承したとは必ずしも言えない。むしろ同書から同様に、当時中国が置かれていた苛酷な国際情勢を痛感し、あるいは嚴復の刺激的な文体と翻訳語から大きな影響を受けた場合も少なくない。

本論文で分析した『天演論』、『物競論』、『政教進化論』、「政法哲学」、『原政』は進化論翻訳書の中で比較的広く読まれたものである。また、『斯賓塞爾勸学篇』は、『国聞彙編』が廃刊になった時点では原著の『社会学研究』の第一章のみの翻訳であり、影響力が大きかったとは言えないが、同書の完訳である嚴復訳『群学肄言』（1903年）も当時比較的広く読まれた訳書であった。このように見れば、進化論導入の起点、即ち、進化論の著作が翻訳された時点において、進化論思想はすでに多くの訳者によって歪められ、その後の中国人の進化論受容も当然ながら歪められていたと言えるのである。

とはいえ、筆者は決して清末の進化論の翻訳をネガティブに捉えているわけではない。今日では、忠実に翻訳しない訳者は批判の対象となるが、近代において、これらの訳者たちはただの訳者であっただけでなく、啓蒙思想家の役割も果たしていた。彼らは進化論に関する著作の翻訳を通して、中国を危機から救う道を探り、中国の読者に様々な道を教示しようとしたのである。したがって、彼らの翻訳作業は歴史的意義が大きかったと言えるだろう。

三、今後の課題

本研究では、主として中国人記者である嚴復、楊蔭杭、楊廷棟を取り上げて彼らの政治思想を考察した。嚴復（1853年～1921年）は初期の在英中国人留学生として1877年から1879年まで留学し、楊蔭杭（1878年～1945年）と楊廷棟（1878/79年？～1950年）は初期の在日中国人留学生として1898年から1902年まで留学した。1905年の科挙廃止以前に留学した彼らは、当時の一般的な立身出世と異なった人生を歩んだ。

清末の初期留学生たちは国家が必要とする人材でありながら、長い間優れた知識人としてなかなか認められなかった。1905年の科挙廃止を契機により、留学はかえって出世の道となり、中国に帰った留学生たちの地位が上がってきた。

興味深いのは、楊蔭杭と楊廷棟の政治的立場の転向である。鄒振環は、革命を主張した楊蔭杭が逮捕を免れるために1906年にアメリカへ留学し、ほどなくして頭を冷やしたと指摘している⁸。また、曹麗国の考察によれば、1905年、1906年ごろから、楊廷棟は明確に立憲を主張するようになったという⁹。そのほか、嚴復は一貫して君主の存在がまだ必要だと認識しており、この時期も立憲派として活動していた。

言うまでもなく、彼らの立憲制の支持は、日露戦争後の、清朝政府の政策によって影響を受けたからに違いない。簡単に言うと、日露戦争（1904年～1905年）で日本が勝利を得た原因は、中国では、立憲が専制に勝ると解釈されており、清朝政府は1906年9月1日に詔書を発布し、これから立憲政体への改革を目指すと言明したという¹⁰。とはいえ、楊蔭杭、楊廷棟が革命派から立憲派に転向したのは、留学生の地位の向上ともかかわっていたのだろう。つまり、留学生の政府での発言力が強まったということは、当時の政治的枠組みの中で改革を行う可能性が見えてきたということでもあっただろう。現実の政治体制の変化がもたらしたこのような政治的理念の変容過程を今後の研究課題として、具体的に分析してみたい。

⁸ 鄒振環「辛亥前楊蔭杭著訳活動述略」蘇州大学：『蘇州大学学报（哲学社会科学版）』、1993年第一期、1993年2月、123頁。また、楊絳「回憶我的父親」羅兪君編、楊絳著『楊絳散文』杭州：浙江文芸出版社、1994年、89-94頁を参照のこと。

⁹ 曹麗国「浅析楊廷棟的救国歷程」邢台学院：『邢台学院学报』第28卷第1期、2013年3月、41頁。

¹⁰ 市古宙三著、劉坤一訳「1901—1911年政治和制度的改革」費正清（John King Fairbank）、劉広京編、中国社会科学院歴史研究所編訳室訳『劍橋中国晚清史：1800—1911年』下巻、北京：中国社会科学出版社、1985年、381頁を参照。